近世説美少年録

八編 一

へ13
3567
36

ヘ13
曲

亭翁口授編

近世説美少年録 五冊

一陽齊豐國畫

文榮堂
群玉堂 精刊

早稲田大學図書館
昭34.6.3 購入
藏書

新刻石童子訓第五版贅言

魏文曹丕嘗いへることあり。曰、文章は經邦の大業也。ゆゑに經籍史傳の第世に神益あると道而已。曹丕は漢賊なり。其言は莫取るべく。其人は悪むべし。是よりして下。記事は虎賁あり。時文は雅俗あり。其事実ならざれば傳ふ足らず。その文雅ならざれば見るふ足らず。然れども實事は新奇ならざる能はず。雅文は俗ふ奇の由出る所。蓋稗史物の本は言なるや浮誕詭譎風る。其甘きこと飴蜜の如し。是をもて雅客とゐく塵俗めて日ふ續者間是あり。但恐らく其閲する者ふ譚

其書を作る者ハ二あり学問廣博和漢に貫通し萬巻の書を見破りて奇文大筆雅俗を交へ其才羅貫紫藍氏ハ[illegible]悪順逆を辨明し世態人情を了解して克蒙昧を醒さしの閲る者覚ずして奬善の域ハ迫る時ハ田夫山妻村童野翁の讀書を嗜ざるの者の為ハ是迷津の一筏也小補なりとも[illegible]其餘の凡籍理義ハ暗く善悪順逆ハ詳らかにして宣淫導慾漫ハ時好ハ媚るが如く獨学軽才已を知ざる者の短筆ハ做さ所閲まる者ハ裨益なしと擇取て愛玩ゑるを眞眼の看官とらひつべし或ハ菽麥を知らざる者其書の醜美を擇ハ由なく唯新しきを愛ぬるも猶書

肆の得意とも或いるハ食るとく時好ハ稱ふと媚むの故欲只是児戯の冊子をうとく巧拙十把一勝ハ凡彈して嘲るもあらん并も好憎ハ因所閲せずして是非をハ而已吾其是を如何せんやと論辨机をうち鳴せて怪むべし鼻梁長くある者五六寸左右の腋ハ翼生出く日ハ三度夜ハ三度盃水銭頃ハ火にうつ臍ハ阿茶と沸さと思へば愕然として夢覚けりあるを一老先生の夜話なりと本集稍稿成る隨ハ録してその頭を解く

弘化三年菊秋霜降前三日亦復婦幼ハ代書を課て奈良漬糟の糟ハ醉なる本編の作者醉中ハ題

巨知賢與梅
貝錦美歌
真
小芳宜の方
音矢やと

佐用六妻尾鰭
間貫佐用六
故世さろくふよ

伊瑣瑣小力士
去来各従其師
鶴脛奈賀四郎
見越松時八

鬼薊苛三富桑
踊の狗信天翁
鉞持隈八利高

枯樹無馬春日
轍鮒有還江時
和達魚九
得時
妹母垣衣

和田十郎
正忠
杵臼入道程栄

新局玉石童子訓第五版自第五十一回至第五十五回總目録

○巻之二十一　第五十一回
部領河原兄弟與主僕戰　白豬居宅縡二郎夜饌客

○巻之二十二　第五十二回
大江峯張逐說松煙齋　文武和合故人知故人

○巻之二十三　第五十三回
李彦孤忠履歷東西　範的奸惡寛縡二郎

○巻之二十四　第五十四回
辨渾不似防守移宿　小雪太竊名巧資惡

○巻之二十五　第五十五回
鏑箭短刀暗陷縡二郎　両箇健宗血濺對決場

新局玉石童子訓巻之二十一

東都　曲亭主人口授編次

第五十一回

部領河原ふ兄弟與主僕戰ふ
白豬の居宅ふ縡二郎夜客を饌を

却説大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能い部領の御の驟雨ふ逐れて遮雨あけるとう勇婦押繪の忠告を思ひかけ禍鬼の今宵那里ふ起るべき事の情を予知そ开と怕るふあらねども外の怨と我らふ心も知らぬ疎人等と爭ふべくもあらぬ俱ふ那里と立去りて勇婦の教へ言の隨意その甲夜の間ふ新部領の這方の河邊ふ来ふけるふ船い前面の岸ふ在りて舟公と呼べども答へぎいふもべと思難て一霎時开頭ふ立在程ふ後方ふ敏ふ夏草ふ一叢深ふ开ダ中ふ晃々とて光り見えけり通能是を見出して成勝ふ向

ひて父母う那見ゆるぞや草葉隱ふ光る螢児ふ似たれども今ハ四月の中
流るふ彼虫の出べくもあらじ何ふ欲あらん と訝れば成勝も遽しく頭を回
熟相て見る如く彼光りハ宛螢児ふ似たれども時猶早況のこゝらぞ動ら
ざれば精まるふ彼草叢の裏ふあそ朽ら株のあるゝらめ夏の夜雨の霽るる
と路傍る朽木ハ皆らく海鰕鮮蟹の甲るゝども光りを發ったとあり又怪むふ
足る者かハとふ詞いまゞ訖らぎと見えべ部領の方よりして這方へ投て
人許ヨヲ走り来ふける蕉火の光りハ爰ふ向ひても知るゝ彼韓錦樅二郎
奈良櫻八重作が外るゝら吵知りたる大江主僕を媚く忠ひて支の怨を
復さえとそ弟子約莫八九名と駈催ち追蒐来ふ各腰ふ長腋刀
ふく棒を挾て路の夏草踏開ゝ彼逃まるゝらふ聲も程遠ら
ぎゝゆえけり登時成勝通能ハ毫も噪ぐ氣色る成勝先謂るゝ

他ゝハ必韓錦奈良櫻と狡ふ疎人ゝが怨むぞゝ怨を倡て弟
子さえふヨヲく將て咱ゝると追蒐来るゝ勝ても負ても無益る所
爭ひを好れとも前面へ渡ゝ船るゝ中一中て懲さぎハ何をりて路を
開ん准備とせゝやといそゞ世ハ通能吵ゝ點頭て然ゝ他ゝハヨヲ勢ゝ
奇を出して打散さぎハ全勝を沒ぐこかゝん和君ハ猶ゝふ在して近つく
敵と逆へゝ咱ゝゝハ箇樣〳〵ふまゞ〳〵とふを成勝ゝち吵てそゝ究竟の便
直ゝ然りとて敵と征ゝふ又とりてまゞ〳〵ゝ何を欲得と見えれば水際ふ植
なる船棹あり只是よかンえと拔含ると通能も倣て脚踏拭て兩莫ふ
折るふ其棹八九尺あり且さぎゝ太くゝねば合の棒二條とゝゝ成勝ハ
其一條の棒を衝立て河邊ふ在り當下通能ハ水際の卵石四五箇を
擇含て袂ふ斂めく殘る棒と携へて三四十間後方るゝ高況處

生茂る雛松の中に身を潜して近づく敵を俟程に散動めて来ぬる追隊に衆人直先に找む一箇の壮佼是則別人なり挺二郎の家弟と呼へる奈良櫻八重作と腰に苛物作る一刀を跨て左に捍棒右に芭蕉火杓高く振照し小力士毎と従へて走り近づく河の邊に杜四郎成勝が單立在るを透し見て敵なる猴子い那首に居り彼逃るを罵りて走蒐らるる程に俟設る通能が干と打出を投石の牙に一れ固の小力士片頬に撲れて吐嗟と一聲叫び果て身を飜して業最の彼光りある頭へそ地響打して仆れける卻舎に下る彼朽木に碎けて撥と散乱る頭顱の上に降懸る光りに驚く追隊の衆人呀とだろに慌惑ひて走退る程に通能透さず打出を投石に亦復両三名撲き倒く揑と轉輾べ叫び蜚散る朽木の光りに孰に疑ひ怕るべき幻術なりんと思ひ一かべ目もくく怯えて立脚もなく起ち滾

ひつ逃走れい八重作も意に逃る貶方に誘引れて故来一方へ百歩許引退ぞく後方を見るに脚を住めて聲高く衆人然のを怕るせを敵に絶に両箇に過ぎ返せくと喚れども早程遠く逃走る小力士毎に耳に彼ぎ返せくもあらざれが八重作に少くに腹立く好き馬に足らぬ平人なる幾名ありとも何に せんいそく とらひ に滅る蕉火投棄て捍棒両に勢悍く取て還しつ成勝と毅んと找めが通能も雛松の蔭より跳出て急拵る彼棒をとりて丁々礮と戦ふに浩りし程に彼隊の頭領韓錦樅二郎に後走に走来つ目今弟八重作が通能と戦ふと見れども帮助るに暇なければ成勝と毅んとそ准備の捍棒斜に引提て怒罵る聲高く烏滸人先度の怨を知るや我韓錦樅二郎が一棒を受試よと言も果さぬ棒取直して毅んと找めば成勝も棒のて丁と受流し受駐めつ聲ぬり立て韓錦とも疎忽なを

縦三郎八重作
追ふく
成勝通能と
力戰を
ろうみ

みちつう
やへ作
ろみ二郎

俺い和主と知る人ならぬふ怨と受るよーあらんやとゐせも果ぎ眼と瞋ーぬ怨
ゐーとゐなさんや田文の洞ゐるとゑ食父女ハ我飽まぞふ懲んと思ふ情由あるとそ御
當ふあろゐさせて鏑一文だも含せざりーふ若ゐる旅客ゐるとそも俺名も亦彼情
由も人の噂ふ知りゐらんふ支を好る慈悲三昧ゑ食父女ふ藥と與へ金さえ食
せく俺鼻と挫まく欲せーハ怨ゐーと孰欲ふへゑ早く勝負と決せぎやと敦圉
暴く棒振揚て睨哮ると成勝ハ哮ゐて阿容ゐる色もゐく开ゐ亦ゐえ怨
言へ咱ゐハ故是放客ゐて今日ゐ下めてゐの地方と過ぎゐまぞ和郎と知
らぞ只彼田文の少女子の世ふ稀ゐるべゑ孝順と見過ーがゐて我秘藏せる藥
と俱ふ真愛と分ちて金さえ一枚取せーと媚く思ふ田舍児の胸最陜ゑ所為
らぞやとゐとゐぬ樅二郎ハ怒れる面色朱と沃ゑて喑たりふ猴子奴息ゑ根
止んと棒閃めゐて轂ゐと透さぞ成勝ハ受流ーゐ丁々と挑爭ふ修練精

妙迭の本事少ゐらぞ優さぞ然ーも虎彪の威力ふ空吾く雲もゐくゐあり
て芝月歩く光明ふ水ふ宿ゐる影清く四下ふ戰ぐ草葉まで見えざる隈ハ
ゐゐけゐ亦程ふ通能ハ重作と棒と交て戰ふと七八十合武藝ふ富ゐる
ゐの壯佼ふハ重作竟ふ敵ーゐぞ持ゐる棒を反飛されて剩左の肩尖と下
高ふ打れ如ぞ心慌く遽ーく帶たる刃と引拔て這と先途と戰ふゐる當
下河原の両敵ハ鬪戰闌干做ーー程樅二郎ハ何思ひけん隙と覗ひ引外
ゐく一丈だゐ退て喘と禁め聲と被て左よや旅客ゐと住やゐ俺ゐの年来
幾名とゐく武藝とゐて名と賣ゐる猛者ゐと角力白打槍棒轂ゐ劍其優
劣と試ーふゐまぞ和殿の如ぞを見ぞ世の英雄と覺ゑれぞ和睦ーて意衷と盡
さえゐゐ等孫と制めゐ急ふ後方と見ゐ久ゐて左よや八重作其客人も由ゐ
技ふ身と傷りて怒と俱ふゐと解ぞ這方へ來ぬせゐゐーあり和睦々々

と吸やけり。然れば奈良揚八重作が峯張通能が打悩されて腕衰へ肩さへ疼めば持る刀を打落されぬ。とかくあだらぬ氣を猛くして嘩叫び戦ふ程に今憶ひも兄樅二郎が云云と吸るを聞く蚤く身を跳せて絶の外へ退て旅客彼と呼る狄和殿も和睦が同意ならば俺豈あう称く祟ん。とらぬ通能微笑てそを勿論のことか。咱ら素より怨る。和睦が迭の事ゆへ。先その刃を斂めぎやとらまて八重作羞る色あり。急が刃を鞘に斂めて一禮されば通能も棒を投棄礼を復して俱に汀渚に赴く。通能が成勝の後方に立て由断ぜず。亦八重作が樅二郎の後方近くぞ佇りける。當下杜四郎成勝が樅二郎がうち向いて思ふに倍る和殿の武藝一豪傑とらつべ。然るを猛可に和睦せられて俱に交りを結ぶに至らば欺び是に優ぬ者る。我壯名を云云と亦是る一人が主僕とらんども叔姪る峯張通能是へと告ぶ亦通

能も找く歩く對面ぬ樅二郎是を見て和君も年尚二十に足らずと見る風流士あり似げもなく武藝に富るのみならず。相貌の京樣て言語應對君子の風あり。咱ら胞兄弟の武胃る。田舍児の類にあらぬ。然るを猶思ひ恐れて闘敷に做ぬとあらば後悔何を及ぶべ。然るを恐怨地と易て其罪とも饒されん一期の幸とらつべし。八重作も這里へ出て陪話稟さぬとのそぐせば八重作が阿と答てゆやとろう。両王僕に欺びと演てのみ刀祢が幻術あり狄衢に陰火を散されて我黨の勢力を折ぬ。それ奴が驚に惑ひて逃走りたる故に和睦が早に整ひ怠生る術をやまく不思と向ふを通能うち笑ひて否と彼が叢の裏にあり。朽木の斬為るこの故に箇樣々々と有る儘に説示せば八重作が呆るまで不意て又いとしもう。樅二郎是とうち呼て感嘆まう且いやう世の常言に疑心暗鬼と生ぜいう

我弟子等の日屬に似げなく。朽木の光りに胸を浸して。逃亡たるも一奇なる意
ふに開き刀祢們を守らせぬ。神明佛陀の冥助にこそあらめ。然らざれば各
腕を扱く我弟子等のいふして。余だりのるに怕んやとれに就ても刀祢們の九
人ならぬと知るに足れり。八重作は余思はむやと。とりに八重作。然べと応へて。俱に嘆
唱あるべしと。成勝急に推禁を過分の褒美に當りがたく我意に和殿
胞兄弟に武勇に勝れたるべし。理義にも闇からざるべに怎生なれば田文な
る。孝女と慈父を飽きでふむでくせらるべしとられて。樅二郎嗟嘆に
堪を開き種々の情由あれども。一朝に説盡しがたく。いで爰より杖を返して
蔵屋に明しぬ。その夜と共に意表を盡さんと卒ぬとなりて。忽地部領
の方にして置きと噪しく。衢に逃しる小力士等。ぶく棒を携へて。齊一
かへ歩みて樅二郎是を見て。又奴們が懲おきに閑詩果くの棒

三味。今さら集ふに無益。八重作は疾めて。和睦のよしを告知らして各
宿所へかへ遣り。孫又蛸く立ち。といそぎ。八重作は谷も果ぬ。身を起して
甚蔓地に走りぬ。如此々々と和睦のよしを報ずけ。散動に躍て鎮りそうち
笑ふ聲安えけり。小程に大江王僕は韓錦弟兄の最懇切に誘引を杏と
いうにさぞ且歓び且謝しそうち連立てゆく程に一町あまり那方に小力士
毎ぶ棒を伏て左右に彷徨に四維列れつ相迎へて俱にいとう。師家衢高に不覚の
掙に面目もなくいるれ。和睦整ひてかだりの芽生えるのにて客人達
も饒しぬ。これいでくと諸聲に勸解るを樅二郎推禁めく。開きやうるる
若們。宿所に加りて明日又来ぬ。そぶ中に見越松と鶴脛は我宿所に立りて
事の由を押繪に告て。饗應の准備をさせよ。夜分に猛可のとられば酒来
豆腐のこまて好ぞうるたる欲疾めれ走れくと追立れば件の両固の小力士は

応を為つて身を起して部領を投てゝそゞけ。然れども餘の小力士なるいとゞ
仮主客の後方に立てゝ遠らむ左右に岐路あり。處をて樅二郎
兄大江主僕に告別をる各々宿所へとそゞ退りける是よりの後主客四名ども相
譚ひ交らをる。韓錦ゞ白猪の宿所なる押繪い彼両箇の小力士なるが報る歟
びに胸い安堵て然いとて躰く他なるあらせつゝ夕饌の儲も丟中のゆるれば
何せんまでも東西足らぬ酒盃も客房に燭甚せて侯程に樅二郎と八重
作い大江主僕に案内をる。かゝる程に見越松時八と鶴脛奈我
四郎い走出て片折戸と早く開放て迎れば成勝と通能い禮を回して主人に
引れて客房に赴く。迭の辭讓に口誼果て賓主の席定る程に押繪い
いそゝく四箇の茶碗に汲含る前茶と盃に乗してもく出て薦めるとき登
時成勝通能い恭く押繪に向て御高恩不慮の驟雨に一雫時檜下を

苟且ならぬ言の恵の歟びと涙ると押繪い安あまき應とをく遽く立く
庵温へ退りしと大江主僕い目送りて主人弟兄に告ていはく鄙に如比々々の
ゆふより料らずも今妹のヨヌカに駭嘆をる之今戦國の世とも婦女子に
似げなきまでに憑しくあるに成れと誉るを樅二郎安果ぎ否我們胞兄弟女
弟さへ些の筋力なるにあらねど女子のヨヌカい鄙語に只是貨財の持腐
をる。施を所あるべくもあらぬ漫に人に知らせそと豫敬言めいて心を注たり
けん。鈍まーさよと呟く程に時八と奈我四郎い酒盃銚子差美の椀を廣蓋に
うち載てゐて出く主客に配りるとき主客の口誼あり樅二郎い笑ーけに大江主峯張主今よりして
ゐるりけに當下主客の口誼あり樅二郎い笑ーけに大江主峯張主今よりして
莫逆の交りと結ぶべきに真の中直りをそはべ俗禮に従ふべけれ。餘の肴を
饒ーぬひねとらひて四箇の盃を分ちて両箇い大江主僕へ両箇い其身と八重

作の前に置せて。皆共侶に受る酒を喫乾して。投せに投る。和睦の盃を分ちて辭去ることゝ。苦樂を俱にまべーとて。折言訖れば時八も奈我四郎も俱に祝言時に豆足よりの後主人弟兄又盃を改めて。大江主僕に薦るものから。成勝も通能も然だら酒を啖れば。樅二郎い時八をもて。押繪に告て夕膳を急くまふく時と移さぬ早もて出せ夕飯に海魚郷の料理に只時の間に合物。炙鷄卵に乾魚の両五種食添て茶淘の碗の錦も色細ちなる歎待に。成勝と通能い歓びを演者と抗て俱に夜飯を過せ程に押繪い二人を。今宵の疎畧を陪話ると。屢飯を装添て最叮寧に歎待を程に樅二郎と八重作い件の両箇の小力士も酒盃を取せ醉を盡して小夜の更ると知らぬげ既にして成勝通能い主人弟兄押繪等に郷食應の歓びを演て酒盃を辭ひ。樅二郎も強難て件の両箇の小力士に盃盤を歛めさせて亦

只煎茶といそぐのゝ時八と奈我四郎い共に庵漏へ退り。成勝も折を見て。樅二郎に譚ざるゆう南韓錦主深夜の長譚無心に似れど今ぢらうちも置がたい田文の孝女父女の為に彼少女を媒妁して。妾に做れとのまゝ。父女い反てうち腹立て。従ふべくもあらざれ。和殿も亦怒に堪ぎ當所に旅宿を饒されねば只得宿所を立去るゝ。又一伙の疎人者に追撃せらまく。盤纏も初李も奪畧まてにあらむやとゝ通能も俱に。然れどそれ少女の親い両眼片脚を傷らまて。廢人に成りーのゝ。田文の洞に露宿して袖乞難て饑に迫ると和殿い猶飽むやありけん郷黨に識めて銭を乞来れ施さるゝと饒ざりーいふにぞと詰ると成勝推禁めて意に人の性い善るに孰ろ哀を知らざるべ況俠氣あり者弱を助る心ゆ已が隨意せざれどとく然まぞにあらねくのせれい疑ふべく従ふべうべいくぐ今より恐を

解して彼等父女を憐愍あり交遊の為に甲斐なし。あの子を思ひあぐやと左右齊一諫まバ樅二郎ハ嗟嘆ふ堪ず跡然として答ふ。教諭寔ふ其理あり。そと思ふ故ふあらねども始よりして彼父女の為ふ謀りを聴れねば反て怨冤となるまでふ飽まで懲して後ふあそ彼等ハ先非を悔もせず。と思慮し我失錯を今稍知るハ遅ろ元幸ふまで交遊の諫言耳ふ串に腸ふ入て既ふ昨非を知る上ハ肝胆を吐意表を盡して詳ふせざるべからず言ヨクとも少も我父ハ紫石の人氏間貫佐用六故世と云ふ嘆れる原是南朝の餘類なる三世相恩の主君ふ仕へて左も右もしてあらけるふ昔ふ異なる世のたぐまれふ幸なりのこヨクりけん我身第兄稚に時潜ふ故郷を立去りて京ふ一稔浪華ふ三稔僑居を後ふ竟ふ這地ふ流れあり駁る剣白打と人ふ教て年来と歴る程ふ遐途人ふ名と知られて富ふあらねど貪るもあらぜ三浪餘ありけるも只一炊の夢と覚て二親なきの身故りしより又五稔の春秋を歴ふ我身不肖ふあれども十八九歳の始より親の家業と羨嗣て駁る剣白打角觝まで這頭の郷の壮佼なるふ師と仰ぎ已が自恣ふ聴れ紛へ用ひらるる。然れば悪事を做さで善ふ與して人の為ふ骨を折らぜと云ふ故ハ或ハ借財の債夫婦の口舌親子の不和何れと云ふ人の為ふ憑まれて説和るを身の務と做せるの只年の秋毎ふ弟子なるを相倶して鎌倉ふ赴て鶴岡の社頭ふ角觝と奥ふ為る外ハ生活なるの為ふ親の時購求め田圃あるまバ餓もせず因て綽號と韓錦樅二郎と嗅做さるハ只是角觝の上ふのこ我身ふ原の姓名あり間貫佐用二郎茂洋是なり。又是多八重作ハ原名佐之七次世なるまとの都て這頭の里人ハ只樅二郎童作と嗅ぶのこよの弐を知るハ幾稀なり。ふ今年の春三月の時候本

郡の主鏑野郡司に軌的大人有一日我樅二郎を招くとなせ。悄地ふ譚ひぬるう。
屬日某の客店ふ逗留ある客一箇の旅客あり。そぶ女児い逗頭ふ稀ふ
花ふ咲けりとそ告る者あり。是ふまり。咱ち潛行あるるとり。開とふ窓ふ間窺
あふ。嘉れまとも野の花の反て目ふ美しく村酒の人をして。醉ある趣あり。
知らるく如く我青年二十の上と三四ふ過ぎ。曩ふ妻を取りしかども産後ふ
母さ子さ共亡く。今尚獨居れば。くぐ彼旅宿の少女と妾ふせまく欲を給
銀支度料ふ。何だろうゆそも厭しからぬ欲れば。とそ我威勢とりて行ふ。
ふらねば悄地ふ和郎と憑むと有右ふとあれ才蘭て成ぬぞとふとふと人もい
我も思へば任用せんぞとくせよかし。倘あのと整いぞば。孰かい和郎と俠者とらん。
ちろるたる狡と直実實て牽出物して酒盃を薦めらと晤譚細やうるり
けまば已肚裏ふ思ふ。領主の所望ふ情慾ふ。然る媒妁い我本意ふ

ぞ。と思へどもいふせん曩ふ我弟八重作が醉ふて人と聞諍して敵を深
痍と負せりとり郡司殿の好意ふく。その事輒く平ぬる彼恩ふとせべ
知又這刀徐ふ武を嗜と力士と愛して我身も時々召るふ今憑ふ
一條とつまもなく推辭禀さば情義両るふ欠るふ似て。必や怨らまれ只
受引ふあくとあらんと思ひ復して合るふ。御意美りひぬ遮莫男子同
士の立入らば。敵るの強ふ弱ふを嫌ぞ思ひの儘ふ説伏て意の如くふまと
けまども然いる媒妁ふ疎ふく。皮波妾ふ劣るべき難美の役ふ叶へども憑ふまぜあ
秘事ふれば且相譚ふて後ふそ成ると成らぬと禀して上ん然るとふ今いふあく
とのあん物と受まらんや若強てあらば決して御意ふ従ひぬとて推辭と王六
ぞあへぞそい左も右ものとるぞう。和郎と俠者と思ぞいとらひぬ秘事と打
出して憑ふ成らば勿論成らぞともよく成して成ぬそふ俠者ふ。たのむくと拜

まゐらせぶ其言慇懃なりければ困じて再度の尋思ふ及ばざる應まるのゝ夜醒て退りて宿所へかへり来て件の事の趣を八重作ふ告て意見を問ふ八重作も亦その支を教へぶ思はれども領主の徴い默止がたけん先その父女ふよりと告く誘へ〻父の心ふらく意決して次の日件の旅宿ふ赴て少女の父某甲ふ来意を告て對面あり領主所望の一條を悄やふ説示して少女の為給へ〻執も合ざうもと猶懲まふ日を累ね歩を運こて幾回とゝく世人さまく欲一なる果ハ口舌の風濤起りて少女の親い怒ふる堪ず我身を罵りて非禮不遜のゆヨヌれい我も亦怒ふ任ゐて捷懲さまく思こ一かとも敵ふゐて孤獨の旅客多ふ恙と中んい大人氣ゐ一。と思ひ復して逆旅主人を權し促して件の父女を立去して逗留を許さぶ然れども彼旅客い強情ふく悔もせぶ這里のゝふ宿ゐるらんやと呟ゐるゞゐ女児を俱して田文のかゝ少て思ふ有右その次の日ふ時ハ若ゞ来て告るを待くふ昨日逐れる彼旅客ゐ宿所を出て遠くもあらぬ乾淨ゐる地方ゑ行人ゐちふ跟らるゝて打擲せられのゝゐらぶ行李も盤纏も喪ひ其頭の人い皆ふ知らぬまゝゑと。ふ今さら快ゐらぶ彼旅客の撻惱されいゐゞゐる招ゐ殃危ゑ自業自得とゐひべ。これどもそのわ彷李と盤纏を実ふ喪ひゐらんゑ我を疑ふ者ゐあり我衆弟子と首ゑ這一郷の壯佼ゐと集合て虚実を糾さんゑと答てその次の日ふ弟子ゐちふ郷黨送もゐく招ゐよゐ穿鑿をりーふ。然る正元支をゐる者一人もあるとゐゑ各俱ふ神水を啜りて齊一折言ひたかゞ後安ふ似れども我本意ゐらぬ媒嫁して見る影もゐる旅客ふ恥言辱られて後と取ーふ旦是まで絶てゐる所今ゐの後郷黨ふ我を侮る者ゐあらん

いふまでもなく。と思難て腹立くして在り一程、又弟子どもの告るを聞くに彼旅客の
五人名ふ目さへ聞さへ傷られて、せん術やうもなん。女児と俱ふ田文なる洞ふ露宿して
往還の人ふ袖乞ちなると我も見る彼もたくとふ者日毎ふヨヌりければ我復肚
裏ふ思ふやうゆくゞ如ない件の父女ども困窮至極せば竟ふ志を改て人を
頼こそ我ふ勸解なん我言品ふ達つるらば、その折ふ衣服錢もれ施しく
資ふるらん。他なるゞ餓ると侯ひべ而已と寄思と考るその郷なる老幼男女と
歳ふて。孰ふもあれ田文の洞なる乞食父女ふ鍬を文でも施さ者ハ我怨寃と第
子どもとのたませ。かゞ人食怕れて違ふ者なり。有右二十日ばかり歴ふる程ふ郷高ふ
我居る里の酒肆ふ八重作ゞ尋来ることふ如此なると告知らして且ふ
件の両箇の青年児ハ旅客とふ雨衣の外持る物なり。意ふ彼奴なるハ
隣郡なる御士の児子なるどもあらん。そ寸も左もあれ右もあれ大哥を酷く罵りて頑
盗ふ。も似るべ。とのひとゝ知らぬ貌して懲しめ給せあるるべ何をのく
俠者とのれん疾出ぬとゝそ。なる折ふ我と共伴ふ酒喫居る奈我四郎時
八以下の弟子なるふ申れとの朽惜ければ我勃然と怒ふ堪ぬそ安らはるるる
衆皆立ねと身を起して走出る短慮の本性其酒肆より程遠ふ時八ゞ
宿所ふ立るて身固ふ皆共伴ふ捍棒蕉火引提々々出ぐも怨寃の往
方と知られ八四下の里人ふ問試るふ武士とあり。両箇の青年児ふ連立て
黄昏時候ふ新部領の方ふ見出ると正可ふ報る者あれば然らばいそ。とふ程ふ
ようと早くも伝聞て後走る小力士と甲乙共ふ十餘名彼河原まで追蒐しふ
奇異朽木の光明ふ怯えし小力士毎ふ憑ふ足らぬ我ゞ弟兄両賢兄と創て
棒を交へ復蔽屋ふ光臨あらんや。料ふ思るれども口彼田文の洞なる
父女と執念深ふ苦やへ皆是已ゞ僻事欲僻事ふ為欲非と飾るふ似く面

四雄交りを
結びて迄ふ
意衷を盡せ
みちよう
やへ他
きりん

あの紙
時八
九

正しくもるるとなるぞいかぞい孰れ理非を判ん愚意い事の始より彼旅客父女あ為ふ方れとそれ謀らるとも事の成らぬるのことるらぞ竟ふ讎敵の思ひと做せるい実ふ已ことなるぞるの所以へたの弐を察しゆひれと唧言がまた長談脩話ふ心ハ同じ八重作も倶ふ嘆息ちてうけ當下成勝通能い列ことり果て成勝先答るもう今てゆそ知る主人の任侠善悪倶ふ憑ぎる言と易ドと思ハまてる勇あるふ似れども咱ちう思ふよりハちらぞ最憚ある言ちう且試ふ打出さん狡ことと樅二郎ゆあぞ开ち庶幾ふ所へ既ふ交遊の弐と結れふ何ちの人意あぞやらで教を羨まく欲さいらでくと請向へ成勝ハ傍る扇を颯と推開て是れを見ぬれ扇ふ蟹目の總括あり人ふ一心の主神ゆ人各志る況とと為るぞ古語ふいつぞや志士ハ溝壑ふ縊るとと忘れぞ勇士ハ其元と喪ふと亡忘れぞ。語ハ老列の二書及孟子ゆも見えそう宜る哉匹夫も志を奪ふべら

らぞ。意ふ田文の旅客ハ廉士ちり孝女へ假今千金の利をもて誘ふとも豈阿容阿容と人の為ふ妾ふちる者ちらんや然ると和殿ハよくも思ひ勇ある旅胆カあるふ兼りて威勢かとりて通りハ抑怨ふあらぞやとらひそ傍と見久れハ通能も倶ふらちう彼父女の為ふ命ちる宿所を逐きてその嘿旨ふ反人ちふ撻悩されて盤纏の金と喪ひハ和殿の所為ふあらぞとらくと起原ハ和殿より出ちう春秋左氏傳と按るふ晋の丈重狐が筆と深て趙盾君と弑せると書ハふ似るべ。然ると和殿ハ猶悟らぞ彼ちる父女が餓ふ及び其志と改め従ハ狡とて侯れハ已と知りて人を知らざる淺慮とりハ無礼れども犯ハ諫て用ひらまぞハ袖と拂て去んのと只彼父女と負ハ負ふあらぞ理とりそハ右の如ハ。辱ちるとる思ひのいとと諭せば成勝然へと應て少峯張の意見も愚意ふ為ふ出人ふ俠者と仰まそ世情ふ貫通ちるちう和殿ふ向ハて云云と博士態る諫

言ハ鄙語ふゝの釋迦ふ説經孔子ふ語道の類るれども文理の為ふ一言の信を盡して稗益あらゞ自他の幸甚しからん意ふ領主の懇望ハ只是色を好むふ過ぎた和殿なる兼ゝる恩あるとも別ふ報恩のわもあるべし。先度の媒妁成就せぎとも彼かゝぎ背くふあられば願くハ田文の志士孝女と和睦して彼困窮を憐愍て邦助ふ為る做りのひるゞ先非を補ふ是第一の捷徑ゝ何かい恥るゝあらん然れば孔聖の教も過て改るふ憚るゝ勿れとゝの惑ひを覚しめ切ゝ主侯の金言傍ゆ聞る八重作まで背ふ汗を流さまで骨ふ徹膽ふ銘じて後悔臍を噬るのゝ況その兄樅二郎ハ夜嚥の酒と共侶ふ無明の醉さ頭ふ醒く昨日の我を恨るまでふ頭ど低ゝと又ハ默然として眠るゞ如く時の移ると知らぢりけりその段らまゞ盡さねども又巻を更めく且下回ふ解分ると聴ねか。

新局玉石童子訓巻之二十一終